

土門 剛



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】
1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著/家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著/講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

意外!? 農水官僚の 評価は「合格点」

松岡利勝農水相、本コラムでは敬意を表して、大センセーと呼ぶ習慣しとなっている。7月の参院選が近づくとつれ、還元水問題を抱えた大センセーが、いつクビになるのか、永田町の関心を集めるようだが、その大センセーにムチを打つように、安倍晋三首相のご意見番的存在の森喜朗元首相がこう言っていた。5月14日付け日経新聞の「あの人ぐらい農業がよく分かっている人はいない。安倍さんは農業に活力を与える意味で期待したんだけどね。」応援に来て

もらわなくてもいい」というのであればつらい。自発的にあれすべきです。党に迷惑をかけると思つたらね」という趣旨の記事だ。森元首相の「あれ」なる意味は、「あんな奴を大臣にして、えらい目に遭つた。早く辞めてくれんかな」ということで、体のよい辞職勧告なのである。大センセー、政府与党の中でも四面楚歌におかれ、最近では人間が生まれ変わったかのように穏やかになったという噂が耳に入ってくる。やはり大センセーでも試練が人間の鍛えるのであるつか。

省内での評価が世評とは若干違つ。国際交渉に当たる官僚氏によれば、

攻めの農政” 松岡利勝 農水大臣に「贈る言葉」

「EU（欧州連合）でも、松岡大臣は自分の言葉で喋っていると合格点です。彼ら（EUの交渉担当者）の評価が高いのは、前任者の中川昭一評議会長もそうですね」というが、それは歴代農水大臣が「自分の言葉」を持たなかつただけのことで、それとの相対比較では「合格点」がもたらえたということではなからつか。それよりも心配事は、交渉相手から「合格点」をもらえたということはいつたい相手に何を話になられたのか。これはぜひ知りたい点だ。

少々気が早いですが、在任中の大センセーの功罪について論評してみよう。地盤沈下著しい農水省の存在を世に知らしめたという点では、「功績」大かもしれない。大センセーのおかげで週刊誌記者までが農水省にやってきた。政策に点数をつけるとなると例の「スシポリス」構想はご愛敬として、バイオエタノール、美しい森林づくりプロジェクト、農産物輸出が講評の対象となろう。バイオ燃料普及では、大センセー

御自ら乗り出して109億円も獲得した。この連休中には、この分野では先進国のブラジルに飛んで見聞を広めてきたそう。主な使い道は、バイオ燃料地域利用モデル実証事業に85億円を投じることだが、役所でも「日本でホントにバイオ燃料なんてできるのかい」といぶかる声もあり、結果的には税金の無駄遣いに終わる可能性が大だ。その答えは、大センセーが御自らの眼で確かめてきたブラジルの広大な農地にある。現段階では、資源作物の研究開発で十分で、予算はあんなには要らなかつたはずではなからつか。

それよりも大センセーにひとつご検討願いたいことがある。日本が輸入するMA（最低輸入義務量）米について、現地でバイオエタノールに加工して日本に輸入するというアイデアをぜひ具体化して欲しいことだ。これが実現すれば減反問題もかなり楽になる。WTO（世界貿易機関）では、主食として持ち込むことが条件となつていて不可能になつている

ようなお堅いことを言うのは、大セ
ンセーの流儀に背くのではなからう
か。例の還元水パワーで、不可能を
可能にしてしまう政治的力量を大セ
ンセーはお持ちのはずだ。

美しい森林づくりプロジェクトは、
今後のやり方次第では合格点になり
得る政策かもしれない。森林整備は
百年の大計である。荒れた森林を見
るにつけ、遅きに失した感もあるが、
早く対策を打たねばなるまい。さす
が林野庁出身で林野業界にも造詣の
深い大センセーならではの政策と評
価してもよいが、老婆心ながらひと
つ心配があるとすれば、大センセー
のいつもの癖が出て、俺に票を入れ



てくれん奴には補助金は出してやら
ん」と嘴を入れてくることである。
抜群のタイミングで起きた緑資源機
構官製談合事件は、そんな不埒な政
治家の介入を防ぐため農水官僚と財
務省が共闘したのかもしれないが、
緑資源機構官製談合事件では大セン
セーはセーフのようである。

官製キャンペーンで 農産物輸出は増えない

大センセーの真骨頂は、攻めの農
政というキャッチフレーズを繰り出
して、かなり前のめりでマスコミ受
けしそうな政策を打ち出してきたこ
とではなからうか。そのひとつが、「ス
シポリス」構想で、心意気やよしの
だが、どれもこれも下手な花火師が
作った花火のように大きな音が出る
だけで、夏の夜空に大輪がパツと開く
ようなことにはならないと見受けた。
大臣就任直後の記者会見では「日本
の農産物というのは世界で一番素晴
らしい。例えて言うとな、柔道の『柔
ちゃん』とも仰っておられた。まこ
とにその通りである。大センセーの
脳裏には「シドニー辺りで『あきた
こまち』でも、1kg1200円から1
300円で売れているわけですよな」
(昨年11月21日の記者会見で)という
考え方がこびりついて離れないよう
だ。大センセーには申し訳ないが、

確かにその値段で売れていることは
事実だが、とても大切な問題は、そ
の「あきたこまち」がいったい、ど
れだけの量が売れているの、という
ことではなからうか。

昨年、ドイツサッカー観戦の折、
在留邦人が8000人も住むデュッ
セルドルフの町を訪れたことがある。
中央駅から歩いて数分の所に、アジ
ア食品を扱うスーパーがあり、店内
を覗くと、大センセー仰せの通り、
新潟・魚沼産コシヒカリが
「Muikamachi Koshihikari」のブラン
ドで5kg53・80ユーロの値札で売ら
れていた(上写真)。邦貨換算で90
00円弱だ。それはそれとして、店
員に「日本のコメは売れているか」
と聞いたら、「ネイ」(ノー)と答え
てきた。この理由をおわかりだろ
うか。ドイツの水では、硬水すぎて日
本人向きの炊飯には向かないのだ。
このことを知っている在留邦人は、
バカ高い国産米を買わないのである。
それを知ってか、大センセーはコ
メ輸出と一緒に水も売れと言い始め
たやに聞く。大センセーの地元、阿
蘇の伏流水の如くアイデアが湧いて
くるようだが、これはなかなかのア
イデアで、中国でお金持ちがわんざ
かと思む上海は「上海の水道水を殺
菌しますと、カルシウムの沈殿が見
られます」と、おもしろすぎるぞ中

国で農業」なるプロゲに出ている。
やはり上海の水は硬水のように、こ
れで5kg9000円もの魚沼コシヒ
カリを炊いても美味しくはない。水
を中国に輸出するアイデアで何とな
く気になるのが、国内で水が輸出で
きるほどあるのかいという水事情だ。
大センセーの地元、熊本・水前寺公
園の池は、最近水が減り気味で、池
の鯉が縦に泳げるぐらいの水量にな
ることもあるそうだ。もし美しい森
林づくりプロジェクトが、池の鯉が
縦に泳げるような水資源対策の政策
であるならば、これはなかなかの深
謀遠慮的政策だ。

冗談はさておいて、大センセーが
存在感を世に示したのが、中国向け
コメ輸出解禁の話ではなからうか。
4月に中国の温家宝首相が来日した
際、大センセーは李長江検疫総局長
との間で、中国へのコメの輸出解禁
について正式に合意(11日)する一
大セレモニを演じたのである。ほ
どなく卸や生産者、行政の関係者ら
を対象にした説明会を大々的に開催、
中国向けコメ輸出キャンペーンと相
成ったが、交渉の舞台裏の論調につ
いてはあまり読んだことがない。

これを伝えた日本農業新聞は、
「産地銘柄にこだわらず高級ブラン
ドの路線で売れるのは魅力的」(九州
地方のJA)、高価格帯で販売でき

辛 上門

今回の日中合意の本質は何だったか。最大の力ギは大センセーの交渉相手にある。先も

高い国産米が本当に上海で売れるのか？

るのであれば、新たな販路拡大にもつながる（東海地方の米卸）など、期待の声もあった」とレポートしたが、もしそうであるならば、大商社が黙っていないはずだ。

中国向けコメ輸出解禁問題。どうやら大センセーの「劇団ひとり」で終わるような感じがしてならない。何よりも不思議なのは、国内で輸出を強く求めるものは誰もおらず、相手の中国でも日本産米の輸入開始に誰も反対していないという不思議な事実である。この交渉、いったいどっちが得をし、損をしたのか、どのメディアも突っ込まない。不思議なことである。それどころか、記者諸侯は相変わらずで、某国営放送の記者などは知人の米卸に「中国向け米輸出で話を聞きにきたい」と取材の申込みきたが、どうやら大センセーのマイนด์・コントロールに引っかけたり、米問題の切り札は対中輸出と思込んでいるらしく、その知人は笑っていた。

紹介したが、李長江検疫総局長が相手で、当然のこと、植物検疫問題が交渉の焦点となり、これをきちんとレポートしたのは農業協同組合新聞だけ。以下、引用しよう。

「中国側が検疫対象としている3種類のカツオブシムシについて、日本側の精米工場に誘引剤を設置して調査を実施、発生がないことを確認したうえで農水省が対中輸出向け精米工場として指定、中国側が視察して認可する手続きをとる」

「輸出する精米は通気性のある包装材料を使用し中国向けであることを明記、中国語で品種、精米工場、輸出者名などを表記する。さらに輸出前に港湾施設でくん蒸処理を行い植物検疫証明書に記述する」

「中国の輸入港（空港）でも到着後に検査を実施し、精米工場指定後の輸出1年目には中国側検査官が実地調査を実施する」

気がかりなのは、中国側による相手国（日本）での中国側の「視察」なり「実施調査を実施」という項目だ。外交は常に相互主義だ。この裏返しは、中国産野菜の対日輸出問題で逆利用されることになる。

これだと思いきすのは大センセーが副大臣をしていた2001年当時、中国産ネギ、シイタケ、豊表の輸入急増が日中間の外交問題に発展、大

センセーは水際で輸入を食い止めることに大ハッスルしたことである。たとえば、ネギが門司港に着いたら、1週間から10日近くネギが置きざらしにするモニタリング強化という措置を命じた。当然、中国は困った。これへの対抗措置が、木箱の検疫強化で大センセーにひと泡吹かせたことは、本コラムでも紹介した通り。思い起こすと、当時、中国側の交渉相手は、今回来日した李長江検疫総局長だった。

今回の合意内容を検討すれば、もう6年前の荒技は使えないどころか、検疫問題が起きたら、日本側検疫官が、中国に向かい「視察」なり「実施調査を実施」することになる。

以前よりは、合理的に争いごとを解決しようという土俵ができてしまった。中国相手の交渉で、大センセーの腕力や大音声が聞こえないとなると一抹の寂しさを感じてしまうのは筆者だけか。

大センセーに申し上げておこう。いくら上海に金持ちがいるといっても、10kg1万円以上の国産米が商業ベースに乗るような輸出などまずあり得ない。よほどの物好きがちょっと買ってくれるだけだろう。それよりも、ホントに輸出を考えるなら馬鹿げた減反などやめて、コメの価格をグッと下げさせ、WTO（世界

貿易機関）協定違反覚悟で輸出補助金をつけてやることだ。

大センセーは、昨年11月21日の記者会見で「私いつも思っているのですが、籠城戦で歴史上勝った試しがないんですね。それは本当に。籠城戦で勝った試しがない。だから、そういうことを考えれば」と、攻めの農政を展開したいと抱負を述べられておられる。籠城戦で勝った試しがない。これは歴史認識の違いというよりも基本的な歴史の勉強が足りないということではないか。大センセーの地元、熊本城は、幕末の西南戦争の折、52日間に及ぶ落城戦を戦い抜き、不落の名城との評価を得たことをご存知ないのであろうか。

何事も勇ましく大向こう受けする突撃戦がいいのではない。常に思慮深く、時には勇敢で、なおかつ謙虚であるというのが、第一級の政治家としての要件である。大センセーは、ほどなく大臣のような「公職」に就くこともなく籠城戦をしばし余儀なくされるはずだが、たまには古今東西の哲学書や文学書や歴史書を手にしていただきたいものである。

何はとまれ、10カ月か1年か知らないが、遅くとも9月の改造人事ではクビになるはずで、大センセーには、大臣の職、まことに「苦勞なことであつたと御慰勞申し上げておこう」。